

研究論文

## 自閉症者の余暇活動を支援する生活支援員の視点

松山 郁夫\*

### The Perspective of Residential Workers about Activity Support for the Leisure Activity of Persons with Autism

Ikuo MATSUYAMA

**【要旨】**本研究は、障害者支援施設の生活支援員における自閉症者の余暇活動を支援する視点を明らかにすることを目的としている。独自の質問紙調査票による調査を実施し、有効回答がなされた生活支援員173人からの回答を分析した。その結果、生活支援員は自閉症者の余暇活動を、「自閉症者が望む余暇支援」、「余暇活動の充実」、「地域の社会資源の活用」、「対人交流の促進」の4つの視点から支援していること、この順番に関心を向けていること等が考察された。

**【キーワード】** 自閉症者、障害者支援施設、生活支援員、余暇活動、余暇支援

#### I はじめに

自閉症は思春期に至って様々な強迫症状や苛立ち、かんしゃくが現れ、退行状態に陥るものが増えてくる。情緒的にも言語的な応答性でも進歩してきても、年長になると、年少時期には明らかでなかった種々の失認や失行などの神経心理学的な症状が見られる<sup>1)</sup>。また、自閉症の強すぎる記憶が物事の本質を理解する姿勢を外界に向けることなく、発達を阻害する元凶ともいえる<sup>2)</sup>と指摘されている。自閉症のうちすべての面での改善が順調で社会適応面でも問題がなく、自立した社会生活が可能になるものは極めて少ない<sup>3)</sup>。その多くは知的障害を伴うため言語理解の遅れを示す。言語の発達がみられても他者の言葉をおうむ返しする反響言語がある<sup>4)</sup>。青年期・成人期になっても、他者とのコミュニケーションに困難さがある等の独特な障害特性があるため、社会適応に関する問題が起きる。

これらのことから、障害者支援施設において生活支援員は、自閉症者の状態を把握した上で、生活環境を整えることを含めて日常生活を支援する必要がある。生活支援員は自閉症者の生活環境を、身辺面、快適さ、及び楽しみに関する3つの視点から捉えようとしており、これらは自閉症者の日常生活の支援を行うなかで得られたものと考えられている<sup>5)</sup>。また、生活支援員は、自閉症者の自立を目指した支援として、日常生活習慣、余暇活動、職業に関する技能を高めたり<sup>6)</sup>、身辺面や楽しみに関する生活環境を整えたりすることを重視している<sup>7)</sup>。特に、自閉症者の健やかな生活を守っていくためには、余暇活動に対する支援において、生活環境に目を向けることも含めてQOL（生活の質）の向上を図る取り組みが求められる。

自閉症者の状態に応じた余暇活動を行うように留意すると、自閉症者が情緒的に安定し、生活支援員や入所している自閉症者との交流を促す場面が増える。このような支援は、自閉症の対人関係等に

\*佐賀大学文化教育学部

関する社会的障害の改善を図るものでもあるため、生活支援員は自閉症者の余暇活動を支援することに対して、満足感を抱くようになると示唆されている<sup>8)</sup>。

これまで、以上のような知見が報告されているが、障害者支援施設において自閉症者の余暇の充実を図るためには、生活支援員が自閉症者の余暇活動に対する支援について、どのように認識しているのかを検討しておく必要がある。したがって、本研究の目的は、障害者支援施設の生活支援員における自閉症者の余暇活動を支援する視点を明らかにすることとする。

## II 方法

### 1. 調査期間と調査方法

平成23年2月22日から同年3月21日までの約1か月間を調査期間とした。全国自閉症者施設協議会の会員施設から無作為に選んだ障害者支援施設(旧体系の知的障害者更生施設)30か所に、無記名で独自の質問紙調査票を郵送により配布し、後日各々の障害者支援施設から郵送により回収した。合計14か所から回答が得られた。なお、倫理的配慮として回答への記入は無記名で行った。さらに、回収された質問紙票について分析を行う際すべて数値化する旨、回答を依頼する説明文に付記し、回答をもって承諾が得られたこととした。

### 2. 調査項目と分析対象

調査対象は、全国自閉症者施設協議会の会員施設となっている入所形態の障害者支援施設に勤務する生活支援員とした。合計189人の回答のうち自閉症者に関わった年数が1年以上の生活支援員で、全項目に回答したアンケートを有効とした。有効回答率は91.5%(173人)であり、生活支援員173人からの回答を分析対象とした。

調査項目については、回答者のプロフィールに関する性別、年齢、職種、自閉症に関わった年数、支援している対象者のライフステージと障害種類、所属する施設の種類・施設の形態を付記した。分析対象者のプロフィールについて、性別は男性98人(56.6%)、女性75人(43.4%)、年齢は20歳から67歳までで、平均35.2歳(SD:9.8)、自閉症者に関わった年数は1年から29年までで、平均7.0年(SD:5.8)、及び173人全員が入所形態の障害者支援施設に所属し、主に関わっている対象者は青年期と成人期、障害種類は知的障害のある自閉症であった。

### 3. 内容と分析方法

予備調査として、障害者支援施設で自閉症者の支援をしている生活支援員5人に、自閉症者の余暇活動を支援する際に留意していることを尋ねた。その結果、複数回答のあった内容を質問項目とし、生活支援員に対して自閉症者の余暇活動を支援するときに普段意識していることを問う項目からなる質問紙票を作成した。

方法は質問紙法による。質問紙には、自閉症者の余暇活動を支援するときに普段意識していることの度合いを「まったく気にしていない」(1点)、「あまり気にしていない」(2点)、「どちらとも言えない」(3点)、「ある程度気にしている」(4点)、「かなり気にしている」(5点)の5件法で質問した。その際、各質問項目について1から5までの数字を等間隔に配置して、当てはまる数字に○を付けるようにした。なお、質問項目は42項目とした(表1)。

以上の質問項目について、生活支援員が自閉症者の余暇活動を支援するときに普段意識しているこ

とに関する特徴を捉えるために、各質問項目の平均値と標準偏差を算出するとともに、Promax 回転を伴う主因子法による因子分析を行った。さらに、因子分析によって得られた各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、各因子間で平均値に差があるかどうかを検討するために、母集団に対応がある場合の一元配置分散分析を行った。なお、各因子の Cronbach の  $\alpha$  係数を求め、各因子別、および全体としての内的一貫性を有するかどうかの検証も行った。

### III 結果

生活支援員が自閉症者の余暇活動を支援するときに普段意識していることの度合いに関する 42 項目の平均値と標準偏差は表 1 のとおりであった。平均値の最小値は 2.49（「18. 10 人以上の集団による余暇活動を取り入れること」）で、最大値は 4.36（「1. 余暇を穏やかに過ごせるようにすること」、「16. 余暇の楽しみ方には個人差があると捉えること」）であった。全 42 項目中、6 項目が 2 点台（14.3%）、24 項目（57.1%）が 3 点台、12 項目（28.6%）が 4 点台であった。

これら 42 項目について、Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は 0.86 であった。また、Bartlett の球面性検定では有意性が認められた（近似カイ 2 乗値 3483.20  $p < .01$ ）。したがって、42 項目については因子分析を行うのに適していると判断した。このため、42 項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は 11.18、3.87、2.35、1.94、1.65、…というものであり、スクリープロットが示す結果からも 4 因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度 4 因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった 16 項目を除外し、再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。なお、これらの 26 項目について Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は 0.85 であった。また、Bartlett の球面性検定では有意性が認められた（近似カイ 2 乗 1989.53  $p < .01$ ）。Promax 回転後の最終的な因子パターンは表 2 の通りであった。なお、回転前の 4 因子で 26 項目の全分散を説明する割合は 54.45% であった。

因子分析により検出された 4 因子についての内的一貫性を、Cronbach の  $\alpha$  係数を用いて検討したところ、26 項目すべてに関しては  $\alpha = 0.88$  であった。第 1 因子に関しては  $\alpha = 0.85$ 、第 2 因子に関しては  $\alpha = 0.86$ 、第 3 因子に関しては  $\alpha = 0.77$ 、第 4 因子に関しては  $\alpha = 0.83$  であった。このため、全体としても各因子別にみても、内的一貫性があると確認された。

第 1 因子は、「余暇を過ごす技能を獲得すること」、「余暇活動を継続的に行うこと」、「余暇活動を支援するプログラムを作ること」、「余暇活動を計画的に行うこと」など、主として自閉症者の余暇活動を充実させることに関する内容を内容としていたため、「余暇活動の充実」と名づけた。

第 2 因子は、「余暇活動の内容を決めるとき利用者の意思を尊重すること」、「利用者の希望をもとに活動内容を決めていくこと」、「余暇活動の内容について利用者の希望を聞くこと」など、主として利用者の意思や希望をもとに余暇活動を支援することを内容としていたため、「自閉症者が望む余暇支援」と名づけた。

第 3 因子は、「地域の支援者の協力を得て余暇活動をすること」、「余暇活動にボランティアを活用すること」、「地域社会に余暇活動の場を開拓していくこと」など、主として地域の社会資源を活用する支援を行う内容を内容としていたため、「地域の社会資源の活用」と名づけた。

第 4 因子は、「集団での余暇活動の楽しさを味わうこと」、「余暇活動を通して利用者の仲間意識を育てること」など、主として集団での余暇活動や対人交流を促進する内容であったため、「対人交流の促進」と名づけた。

因子別の平均値（標準偏差：SD）は、第1因子3.54（SD：0.66）、第2因子3.73（SD：0.80）、第3因子2.89（SD：0.80）、第4因子2.73（SD：0.78）であった。各因子間の平均値について母集団に対応がある場合の一元配置分散分析を行った結果、4因子の平均値間には有意差が認められた（表3）。さらに、各因子の平均値に対して多重比較を行った結果、すべての因子の平均値間に有意差が認められた。このため、生活支援員は自閉症者に対して余暇活動を支援するとき、第2因子「自閉症者が望む余暇支援」、第1因子「余暇活動の充実」、第3因子「地域の社会資源の活用」、第4因子「対人交流の促進」の順に捉えようとしていることが示唆された（表4）。

**表1 自閉症者への余暇支援に対する意識についての平均値と標準偏差**

| 質問項目                            | 平均   | 標準偏差  |
|---------------------------------|------|-------|
| 1. 余暇を穏やかに過ごせるようにすること           | 4.36 | .647  |
| 2. 余暇活動を継続的に行うこと                | 4.01 | .778  |
| 3. 文化的な余暇活動を行うこと                | 3.14 | .874  |
| 4. 身体運動に関する余暇活動を行うこと            | 3.56 | .865  |
| 5. 集団での余暇活動の楽しさを味わうこと           | 2.97 | 1.042 |
| 6. 余暇を過ごす技能を獲得すること              | 3.35 | .962  |
| 7. 余暇活動を計画的に行うこと                | 3.78 | .834  |
| 8. 余暇活動を支援するプログラムを作ること          | 3.51 | .925  |
| 9. 障害特性に合わせた余暇活動を行うこと           | 4.13 | .849  |
| 10. 利用者の地域生活を支える視点を余暇活動に取り入れること | 3.28 | .851  |
| 11. 余暇活動を通して利用者の仲間意識を育てること      | 2.68 | .963  |
| 12. 余暇の過ごし方の技能を高めること            | 3.10 | .903  |
| 13. 4～5人程度の小グループによる余暇活動を取り入れること | 3.11 | .872  |
| 14. 利用者が興味・関心を示す余暇活動の内容を提案すること  | 4.23 | .685  |
| 15. 余暇活動の内容について利用者の希望を聞くこと      | 4.11 | .751  |
| 16. 余暇の楽しみ方には個人差があると捉えること       | 4.36 | .647  |
| 17. 生活支援員等職員が提案して活動内容を決めていくこと   | 3.47 | .899  |
| 18. 10人以上の集団による余暇活動を取り入れること     | 2.49 | .992  |
| 19. 地域の支援者の協力を得て余暇活動をすること       | 3.02 | .927  |
| 20. 利用者に複数の余暇活動を提示すること          | 3.25 | .941  |
| 21. 利用者がさまざまな余暇活動を体験できるようにすること  | 3.87 | .764  |
| 22. 余暇活動の内容を決めるとき利用者の意思を尊重すること  | 4.10 | .724  |
| 23. 利用者の希望をもとに活動内容を決めていくこと      | 4.01 | .699  |
| 24. 余暇活動の場所を確保すること              | 3.88 | .841  |
| 25. 個々の利用者に応じた余暇活動を行うこと         | 4.27 | .748  |
| 26. 利用者の余暇における楽しい過ごし方を見つけること    | 4.25 | .710  |
| 27. 年齢に合わせた余暇活動を行うこと            | 3.58 | 1.006 |
| 28. 余暇活動において人との交流ができるようにすること    | 3.01 | .892  |
| 29. 余暇活動にボランティアを活用すること          | 2.82 | .934  |
| 30. 余暇活動の内容が理解できるようにすること        | 3.65 | .860  |

|                                  |      |       |
|----------------------------------|------|-------|
| 31. 地域の体育館等の施設を利用して余暇活動をすること     | 2.77 | 1.029 |
| 32. 利用者に身近な余暇活動の内容を提案すること        | 3.66 | .816  |
| 33. 余暇活動の種類を増やすこと                | 3.68 | .799  |
| 34. 余暇活動で利用者が行きたい場所に移動できるようにすること | 3.60 | .875  |
| 35. 余暇活動で公共交通機関を利用できるようにすること     | 2.91 | 1.146 |
| 36. 利用者が希望する余暇活動を選択できるようにすること    | 3.83 | .861  |
| 37. 余暇活動について利用者が楽しかったかどうかを表現すること | 3.62 | .871  |
| 38. 利用者が楽しめる余暇活動については継続すること      | 4.33 | .630  |
| 39. 地域社会に余暇活動の場を開拓していくこと         | 3.43 | .942  |
| 40. 余暇支援が公的な支援として認められるようにすること    | 3.37 | .989  |
| 41. 余暇の過し方に関する個別支援プログラムを作成すること   | 3.59 | .982  |
| 42. 余暇活動の内容を決めるときに利用者の興味を尊重すること  | 4.23 | .742  |

表2 自閉症者への余暇支援に対する意識についての因子分析結果

| 質問項目                            | 1因子   | 2因子   | 3因子   | 4因子   |
|---------------------------------|-------|-------|-------|-------|
| <b>第1因子「余暇活動の充実」</b>            |       |       |       |       |
| 6. 余暇を過ごす技能を獲得すること              | .661  | -.158 | -.033 | .133  |
| 2. 余暇活動を継続的に行うこと                | .638  | -.139 | .084  | .029  |
| 8. 余暇活動を支援するプログラムを作ること          | .605  | -.019 | .106  | .088  |
| 7. 余暇活動を計画的に行うこと                | .595  | -.100 | .258  | -.073 |
| 17. 生活支援員等職員が提案して活動内容を決めていくこと   | .568  | -.160 | -.211 | .183  |
| 41. 余暇の過し方に関する個別支援プログラムを作成すること  | .537  | .176  | .124  | .009  |
| 26. 利用者の余暇における楽しい過ごし方を見つけること    | .531  | .360  | -.235 | .060  |
| 14. 利用者が興味・関心を示す余暇活動の内容を提案すること  | .490  | .318  | -.122 | -.103 |
| 9. 障害特性に合わせた余暇活動を行うこと           | .478  | .174  | .092  | -.228 |
| 12. 余暇の過ごし方の技能を高めること            | .458  | .024  | .117  | .148  |
| 4. 身体運動に関する余暇活動を行うこと            | .454  | -.051 | -.028 | .336  |
| 38. 利用者が楽しめる余暇活動については継続すること     | .434  | .299  | -.077 | -.091 |
| <b>第2因子「自閉症者が望む余暇支援」</b>        |       |       |       |       |
| 22. 余暇活動の内容を決めるとき利用者の意思を尊重すること  | -.087 | .893  | -.039 | .127  |
| 23. 利用者の希望をもとに活動内容を決めていくこと      | -.124 | .834  | .059  | .062  |
| 15. 余暇活動の内容について利用者の希望を聞くこと      | -.226 | .800  | .023  | .059  |
| 42. 余暇活動の内容を決めるときに利用者の興味を尊重すること | .146  | .696  | -.014 | -.058 |
| 36. 利用者が希望する余暇活動を選択できるようにすること   | .038  | .624  | .124  | -.043 |
| <b>第3因子「地域の社会資源の活用」</b>         |       |       |       |       |
| 19. 地域の支援者の協力を得て余暇活動をすること       | -.151 | .059  | .755  | -.007 |
| 29. 余暇活動にボランティアを活用すること          | -.007 | -.092 | .652  | .175  |
| 39. 地域社会に余暇活動の場を開拓していくこと        | .183  | .044  | .526  | -.214 |
| 10. 利用者の地域生活を支える視点を余暇活動に取り入れること | .242  | -.043 | .525  | -.010 |

|                              |       |       |       |      |
|------------------------------|-------|-------|-------|------|
| 31. 地域の体育館等の施設を利用して余暇活動をすること | -.096 | .045  | .504  | .241 |
| 35. 余暇活動で公共交通機関を利用できるようにすること | .125  | .110  | .449  | .050 |
| <b>第4因子「対人交流の促進」</b>         |       |       |       |      |
| 5. 集団での余暇活動の楽しさを味わうこと        | .191  | .008  | -.080 | .788 |
| 11. 余暇活動を通して利用者の仲間意識を育てること   | -.005 | .156  | .151  | .772 |
| 18. 10人以上の集団による余暇活動を取り入れること  | .050  | -.004 | .092  | .733 |

表3 自閉症者への余暇支援に対する意識についての分散分析の結果

| 区 分  | 平方和     | 自由度 | 平均平方   | F値       |
|------|---------|-----|--------|----------|
| 余暇支援 | 123.852 | 3   | 41.284 | 149.405* |
| 被調査者 | 256.527 | 172 |        |          |
| 誤 差  | 142.583 | 516 | .276   |          |
| 全 体  | 522.962 | 691 |        |          |

\* $p < .05$

表4 自閉症者への余暇支援に対する意識についての多重比較による各因子の平均値の差

| 区 分               | 第2因子   | 第3因子  | 第4因子   |
|-------------------|--------|-------|--------|
| 第1因子「余暇活動の充実」     | -.189* | .653* | .814*  |
| 第2因子「自閉症者が望む余暇支援」 |        | .842* | 1.003* |
| 第3因子「地域の社会資源の活用」  |        |       | .161*  |
| 第4因子「対人交流の促進」     |        |       |        |

\* $p < .05$

#### IV 考 察

入所形態をとる障害者支援施設は日常生活を営む場であるため、生活支援員は自閉症者と日常生活の支障に対する援助を行っている。自閉症の社会的行動に関しては、ルールが理解できない、働きかけによっておこる行動が乏しい、他の成員が示す行動の観察・模倣が起こりにくい、及び役割行動がとれない等の指摘がなされている<sup>9)</sup>。障害者支援施設において、生活支援員が自閉症者の余暇活動を支援するときに、普段意識していることの度合いを問う項目のうち57.1%が3点台、28.6%が4点台であった。したがって、生活支援員は自閉症者の余暇支援全般に対して関心を向けて、自閉症者が充実した余暇を過ごす支援を心がけているものと考えられる。

青年期には将来の自立生活に向けて対人関係を形成し、社会性を獲得することが求められる。しかし、激しく感情が動き、昂揚拡大と沈うつ萎縮の両極を動揺し、強迫性をもち、分化して重層的になるなどの特色を表す<sup>10)</sup>。自閉症の場合、他者とのコミュニケーションが不可欠であり、安定した情緒が必要になる。生活支援員は自閉症者を支援する際、対人関係、社会性、情緒を重視している<sup>11)</sup>。このため、第1因子「余暇活動の充実」は、生活支援員が自閉症者の情緒を安定させ、社会性の向上を促していくために、余暇活動に対する支援を充実させようとしていることを表していると推察される。

障害者支援施設において、生活支援員は自閉症者の日常生活の支障に対する援助を行っている。自閉症に対する相談を行う機関では家族や支援者から、こだわり、パニックなどの行動障害への対応が

困難との相談が多い<sup>12)</sup>。自閉症には特定の刺激のみに強く反応する一方、それ以外に対しては無関心であるという刺激の過剰選択性や知覚過敏がある<sup>13)</sup>。また、自閉症者のコミュニケーション能力の障害や社会的認知の障害は、対人関係の形成に困難をもたらし、そのことで不適応を生じる可能性が高い<sup>14)</sup>。援助困難な自閉症者への関わりを円滑に進めるためには、その心理的特性を捉えることが求められる<sup>15)</sup>。したがって、第2因子「自閉症者が望む余暇支援」は、社会適応に問題を抱える自閉症者の余暇活動を支援する場合、自閉症者が関心を示す活動に取り組む必要があるとの認識を表していると言える。

自閉症者には、活動する場所や関わる人間が制限されている<sup>16)</sup>。余暇活動においては活動スキルを習得させるだけでなく、本人の意向を考慮して自分なりの楽しみ方ができるようにしていく必要がある<sup>17)</sup>。障害者支援施設についても施設内だけでなく、地域社会へ出向いて余暇活動の幅を広げることが求められる。したがって、第3因子「地域の社会資源の活用」は、生活支援員が自閉症者の余暇活動において、地域の社会資源を活用し、余暇活動の幅を広げる必要があると認識していることを表していると考えられる。

自閉症とコミュニケーションをとるときに、自閉症者が相手の発する言葉の意味を把握するのが困難な場合が多い理由について、「言葉の文化に依拠した生活に十分入っていないことを示している。自閉症の理解においては、感覚、情緒の分化を視野に置きながら関わることが求められる。構造化は自閉症の認知を容易にしていくことに効果があるが、そこに他の人間との交流を主としなくなることを問題としなければならない」との指摘がある<sup>18)</sup>。したがって、自閉症者の障害を軽減し、発達を促進させるには、他者との人間関係の交流を通して行動を展開させていく必要がある<sup>19)</sup>。このため、第4因子「対人交流の促進」は、生活支援員が自閉症者の余暇活動を支援するときに対人関係が成立するような支援を心がけていることを表しているのであろう。

障害者支援施設を利用している自閉症者には、相手の意図や周囲の状況に考慮した会話をするのが困難である<sup>20)</sup>。独特な障害特性により、生活支援員は自閉症者が望む余暇活動を充実させるように心がけていると考えられる。また、生活支援員は、主に知的障害のある自閉症者の余暇活動を支援しているため、自閉症者に対する具体的な余暇活動の支援を重視していると言える。その際、余暇活動の内容によっては、地域の社会資源を活用することも必要になってくる。さらに、生活支援員は自閉症者の行動に関して、自閉症者とのコミュニケーションが成立しないことによって、内面の心理的特性を捉えることに困難さがあると認識している<sup>21)</sup>。自閉症者とコミュニケーションをとるように努めたとしても、対人交流の促進を図ることには困難さがある。

これらのことから、生活支援員は自閉症者が望む余暇支援のあり方について考え、余暇活動を充実させるように支援しているため、地域の社会資源を活用するように図り、さらには、自閉症にとって最も困難な対人交流を促進するように心がけるものと考えられる。したがって、生活支援員が自閉症者の余暇活動を支援する視点については、その関心が高い方から、「自閉症者が望む余暇支援」、「余暇活動の充実」、「地域の社会資源の活用」、「対人交流の促進」の順番になると推察される。

自閉症者の障害を軽減し、発達を促進させるには、他者との人間関係の交流を通して行動を展開させる必要がある<sup>22)</sup>。生活支援員には、地域の社会資源の活用と対人交流の促進により関心を向け、自閉症者の余暇活動の支援の充実を図ることが求められる。また、それを支える国による障害者支援施設の自閉症者を支援する施策の充実が不可欠と考えられる。

## V 結論

本研究では、障害者支援施設の生活支援員は自閉症者に対して余暇活動を支援するとき、次のことが考察された。①充実した余暇を過ごす支援について広く捉えようとしている。②「自閉症者が望む余暇支援」、「余暇活動の充実」、「地域の社会資源の活用」、「対人交流の促進」の4つの視点があり、この順に関心を向けている。③地域の社会資源の活用と対人交流の促進により関心を向け、自閉症者の余暇活動の支援の充実を図る必要がある。④それを支える国による施策が不可欠である。

## 謝辞

調査に際し、ご協力いただきました障害者支援施設の施設長と生活支援員の皆様に、感謝申し上げます。

## 【引用文献】

- 1) 十亀史郎 自閉症児の症状と治療について—入院治療の現状とあり方— 臨床精神医学 8 937 1978
- 2) 楠峰光 障害児の心理 障害児教育総説 (山下功編) 九大出版会 1990
- 3) 村田豊久 自閉症 医歯薬出版 1980
- 4) 松山郁夫 自閉症児の療育 障害のある子どもの福祉と療育 (松山郁夫・米田博編著) 建帛社 2005
- 5) 松山郁夫 自閉症者の生活環境に対する生活支援員の視点—知的障害者更生施設的生活支援員に対する意識調査を通じて 福祉研究 101 28-34 2010
- 6) Brenda Scheuermann, Jo Webber, Autism:Teaching DOES Make a Difference, WADSWORTH 2002
- 7) 同上5)
- 8) 松山郁夫 障害者支援施設における自閉症者に対する余暇支援の有効性：生活支援員に対する質問紙調査を通して 佐賀大学文化教育学部研究論文集 16(2) 123-132 2012
- 9) 篁一誠 集団治療での諸問題 行動療法研究 2(2) 21-26 1977
- 10) 西平直喜 青年期 発達心理学辞典 (岡本夏木・清水御代明・村井潤一監修) ミネルヴァ書房 398 1995
- 11) 松山郁夫 内田博昭 自閉症のライフステージにおける療育に対する直接処遇職員の捉え方 佐賀大学文化教育学部研究論文集 12(1) 205-214 2007
- 12) 篠田達明監修 自閉症スペクトラムの医療・療育・教育 金芳堂 2005
- 13) 石井哲夫 発達障害者支援法の概要と運用の現状 更生保護 57(3) 2006
- 14) 小林隆児 自閉症の発達精神病理と治療 岩崎学術出版 1999
- 15) 同上12)
- 16) 同上9)
- 17) 関戸英紀 中学校特殊学級における知的障害児に対する余暇指導 横浜国立大学教育人間科学部紀要 I 教育科学 1 35-48 1998
- 18) 石井哲夫 受容的交流理論覚え書 白梅学園短期大学教育・福祉センター研究年報 4 1-4 1999
- 19) Baron-Cohen, S., Bolton, P. 久保紘章訳 自閉症の原因 「自閉症入門」 中央法規出版 51-61 1997
- 20) 内田博昭 年長自閉症児の療育 障害のある子どもの福祉と療育 (松山郁夫・米田博編著) 建帛社 2005
- 21) 松山郁夫 自閉症者の状態に対する知的障害者更生施設的生活支援員の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集 12(2) 281-287 2008
- 22) 松山郁夫 青年期・成人期の自閉症者が示す感情に対する生活支援員の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集 14(1) 2009 309-316